

日本のオペラ公演2012

—公演データの分析とその考察—

『日本のオペラ年鑑』 編纂委員会・石田 麻子

1. はじめに【表1】

大震災に見舞われた2011年の日本。そのオペラ界がどれほど大きなダメージを受けたのか、今、振り返り見渡して、全てを把握しようとするのは時期尚早かもしれない。何年か経ってから、オペラ公演史の中で、ようやく見えてくることもある。本年鑑には、震災から約1年の時を経た2012年のオペラ公演データを収録しているが、これが今後のオペラ界の動きをどれほど予言しているのか。2012年のオペラ公演に関わる数字から見えてくる、音楽と社会の関係性はいかなるものだろうか。

今回も、全てのオペラ公演を、756席以上の大規模会場をA表に、756席未満の中・小規模会場をB表に、それぞれ区分して分析している。これは、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの客席数である756席を区切りとして、大規模会場と中・小規模会場とに分類したものである。オペラ劇場としての機能を備えた同ホールは、一定規模の公演を実施するために必要な条件を備えていると考えられることから、編纂委員会での検討のうえ、比較的大型の公演とそれ以外のものとを便宜的に分類するために設けた基準である。学校の体育館での公演など、オペラ公演や演奏会を行うことを目的としない会場での公演については、規模にかかわらず中・小規模公演に

分類している。また、演奏会形式・ハイライト公演といった本来の上演形式とは異なる公演形態のものをC表として、巻末の資料編に掲載しているのは例年どおりである。

さらに、オペラ団体のみならず、劇場、音楽堂等による公演、大学等の教育機関の学生が自主的に行う公演、共同制作公演等は「国内団体公演」に、大学主催公演、団体付属や劇場付属研修所等の発表公演等は「教育研究団体公演」に、海外の歌劇場や音楽祭等の来日公演は「海外団体公演」にそれぞれ分類している。すなわち、「国内団体」の研修所公演は「教育研究団体」としたため、たとえば新国立劇場公演は「国内団体」に、新国立劇場オペラ研修所公演は「教育研究団体」にそれぞれ分けてある。団体が他団体と共同制作などをした場合は、その団体が単体で実施した場合とは区別し、別団体とした。例えば(公財)びわ湖ホールは1団体として、(公財)びわ湖ホールがスイス・バーゼル歌劇場と共同制作した場合は、さらに別の1団体として数えている。

2. 日本のオペラ公演2012年

2-1. 総上演回数と活動団体数の推移【図1、表2、図2】

2012年は、A表とB表をあわせた総上演回数が1,117回と、2011年の903回よりも大幅に増加した。上演団体数も277団体と、

表1 分析対象と上演団体の区分 (○は本稿での分析対象、×は対象とせず、巻末に公演表を掲載)

	1. 国内団体	2. 教育研究団体	3. 海外団体
A表：大規模会場公演 = 756席以上の客席数	○	○	○
B表：中・小規模会場公演 = 756席未満の客席数	○	○	○
C表：演奏会形式等		×	

2010年の232団体、2011年の218団体よりも大幅に増えている。大規模会場での公演は2011年の434回から2012年は490回へと増え、中・小規模会場での公演は2011年の469回から627回へと大幅な増加となっている。

国内団体に関しては、2011年には189団体による773回だったのが、2012年は249団体による978回となった。2012年は2011年に比べれば、国内団体の公演数が増えたことに伴い、上演回数も大きく数を増やしている。また、2010年が202団体による993回だったのも、それと比べると団体数は増え、

上演回数も減少したとはいえ、ほぼ回復したことになる。

教育研究団体は、2010年は20団体による51回、2011年は22団体による56回、2012年は23団体による61回と、徐々に多くなってきている。

海外団体は、2010年は10団体による126回、2011年は7団体の74回、2012年は5団体による78回となった。海外のオペラ劇場の招聘公演に関しては、公演回数が回復していないどころか、来日団体数そのものが減少していることが明らかになった。

図1 総上演回数と活動団体数の推移

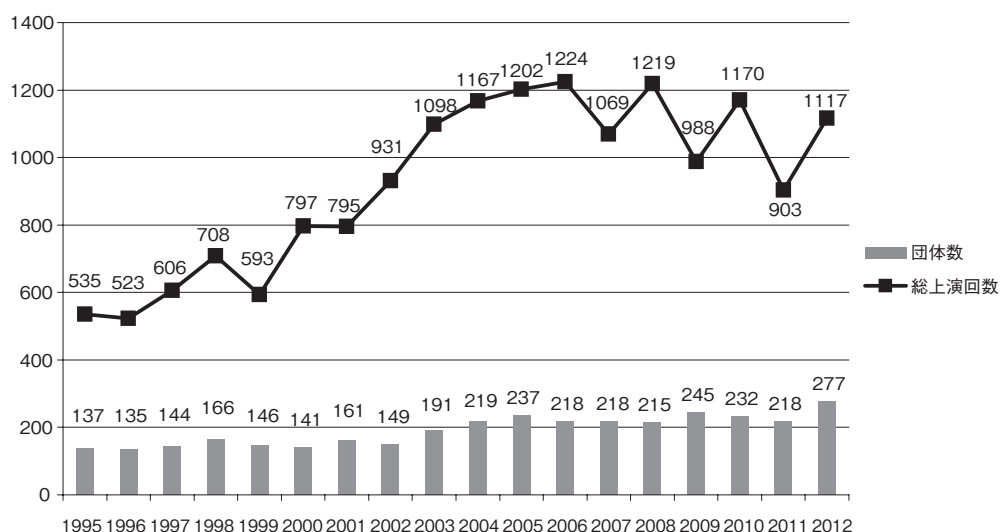
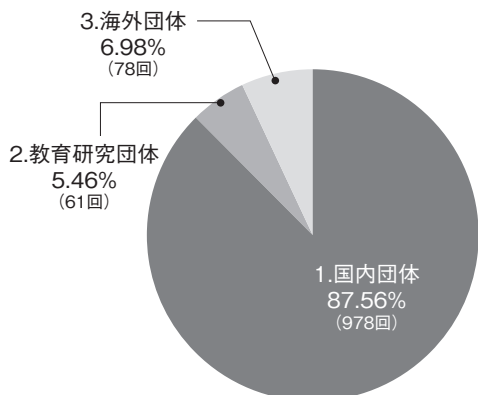


表2 2012年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

A. 大規模会場 (756席以上)			B. 中・小規模会場 (756席未満)			合計 (A + B)		
カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数*	総上演回数
1. 国内団体	131	373	1. 国内団体	140	605	1. 国内団体	249	978
2. 教育研究団体	16	39	2. 教育研究団体	9	22	2. 教育研究団体	23	61
3. 海外団体	5	78	3. 海外団体	0	0	3. 海外団体	5	78
合計 / 総団体数・総上演回数	152	490/1116	合計 / 総団体数・総上演回数	149	627/1116	合計	277	1117

* 団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したもの。同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

図2 各カテゴリーの総上演回数が全体に占める割合



2-2. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表3は、大規模会場で6回以上の公演を実施した国内団体についてまとめたものである(新国立劇場は別記)。

東京二期会は、ダニエレ・アバド演出による《ナブッコ》を3回、クラウド・グート演出の《パルジファル》を4回など、話題の演出家を起用して主催公演を行った。前年に引き続いて外部組織との協働による大規模な公演も行われた。文化庁の「平成23年度優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業(共同制作公演)」による、びわ湖ホール・神奈川県民ホール・東京二期会・京都市交響楽団・神奈川フィルハーモニー管弦楽団との《タンホイザー》は、ミヒヤエル・ハンベ演出。びわ湖ホールと神奈川県民ホールで、各2回上演された。神奈川県民ホールでは、前年の《アイダ》が東日本大震災のため中止となったことから、同ホールにとっては2年ぶりに共同制作公演が実現した格好である。

日生劇場と共同で続けている公演事業は、2012年はアリベルト・ライマン作曲《メデア》を3回。これが、同作品の日本初演となった。作曲家自身も来日するなど、話題となったこの公演は、同劇場の開場50周年記念と読売日本交響楽団50周年記念、東京二期会

の60周年が重なったの記念行事で、各組織にとっても一層力の入ったものとなり、優れた成果を残した。東京二期会は、このほかにも《カヴァレリア・ルスティカーナ》《パリアッチ(道化師)》を4回公演している。主催公演は、概ね4回公演が定着した格好だ。ダブルキャストで2回ずつ歌う機会が得られるのは歌手にとって何よりのこと。これからは、観客の入場率を上げる一層の努力が求められている。

藤原歌劇団は、2012年都民芸術フェスティバル参加公演として、アルベルト・ゼツダ指揮による《フィガロの結婚》を2回上演し、さらに秋には《夢遊病の女》を2回上演した。日本オペラ協会は、「平成23年度文化庁 優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業(共同制作公演)」による《高野聖》を2回公演した。これも都民芸術フェスティバル参加公演であり、さらに日本オペラ協会にとっては、「日本オペラシリーズNo.73」ともなるもの。この《高野聖》を、日本オペラ協会は、金沢芸術創造財団、高岡市民文化振興事業団、石川県音楽文化振興事業団との共同制作公演として実施した。今回の東京公演にさきがけて、2011年12月に金沢と高岡の2都市で各1回ずつ計2回公演されたため、都合4回の公演が行われたことになる。日本のオペラ作品は規模の大きな会場での上演機会がなかなか得られないのだが、少しでも多く公演を重ねることが、歌手たちの作品理解の深化につながるの間違いはない。今回の共同により、公演回数が増えたことが極めて重要な機会となったのは、先の2回公演に続いて行われた東京での公演成果に表れていた。

びわ湖ホールは、東京二期会の項で挙げた共同制作による《タンホイザー》公演を同ホールでは2回行った(表3では、神奈川県民ホールでの公演も含めて4回としている)。その他に、中ホールでの《森は生きている》

や《三文オペラ》を、びわ湖ホール声楽アンサンブルが中心となって2回ずつ実施している。さらに、スイス・バーゼル歌劇場との共同制作公演として、現在、同歌劇場インテントで、ハンブルク歌劇場の次期インテントへの就任が決まっているジョルジュ・デルノン演出による《コジ・ファン・トゥッテ》を2回上演した。こうして、びわ湖ホールは、日本を代表するオペラ上演劇場とし

て、さらには若手の歌手人材を育てる活動も行う、日本のオペラ制作の1つの中心地となっている。

兵庫県立芸術文化センターは、「平成24年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」により、「佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2012」と銘打って、《トスカ》を8回公演した。

このほか表3には含まれないが、関西二期

表3 2012年の国内団体公演活動データ*1

団体名	上演作品	大規模会場		中・小規模会場		合計
		上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
オペラシアターこんにゃく座	金色夜叉	0	58	5	184	242
	森は生きている	11		79		
	ピノッキオ	8		60		
	ねこのくにのおきやくさま	4		21		
	ネズミの涙	31		12		
	よだかの星	4		7		
東京二期会	ナブッコ	3	26	0	0	26
	タンホイザー*2	4				
	スペイン時間	2				
	子どもと魔法	2				
	カヴァレリア・ルスティカーナ	4				
	パリアッチ	4				
	パルジファル	4				
	メデア*3	3				
(一社)東京国際芸術協会	修道女アンジェリカ	3	14	0	2	16
	ジャンニ・スキッキ	3		0		
	魔笛	4		0		
	ラ・ボエーム	0		2		
	ラインの黄金	4		0		
(株)ジャパン・アーツ/タルカス	セビリアの理髪師	12	12	0	0	12
びわ湖ホール	タンホイザー*2	4	10	0	0	10
	森は生きている	2				
	三文オペラ	2				
	コジ・ファン・トゥッテ	2				
兵庫県立芸術文化センター	トスカ	8	8	0	0	8
日生劇場	メデア*3	3	8	0	0	8
((公財)ニッセイ文化振興財団)	フィガロの結婚	5				
藤原歌劇団	フィガロの結婚	2	4	0	0	6
	夢遊病の女	2				
日本オペラ協会	高野聖	2	2			
上位8団体合計上演回数*4 ／総上演回数	—	—	142/490*5	—	186/627	328/1117

- *1 大規模会場で6回以上の上演をしている団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共催公演を含む。
 *2 《タンホイザー》4回は、(公財)びわ湖ホール/神奈川県民ホール/(公財)東京二期会他の共催・制作(自会場以外での上演回数も記載している)。
 *3 《メデア》3回は、(公財)ニッセイ文化振興財団と(公財)東京二期会ほかの共催(同公演も、各組織の上演回数に重ねて記載している)。
 *4 藤原歌劇団と日本オペラ協会は、日本オペラ振興会として、同一組織にあるオペラ団体。そのため、1団体として数えた。
 *5 上記のとおり、本表には、複数団体の共同制作事業が、関係した団体すべての項目に重複して掲載されている。したがって、合計142回とあるのは、実際には合計135回である。

会が、自主事業として「平成24年度文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）」の支援を受けて実施した《アドリアーナ・ルクブルール》を2回、さらに同補助金により《コジ・ファン・トゥッテ》を2回公演した。堺シティオペラによる團伊玖磨

作曲《ちゃんちき》の2回公演は高い評価を得ることに成功した。これら各団体やびわ湖や兵庫などの劇場が、関西のオペラ上演を牽引する役割を担っている。

オペラシアターこんにゃく座は、震災の影響を少なからず受けた結果、2010年の256

表4-1 2012年新国立劇場主催のオペラ公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
1月	ラ・ボエーム	G. プッチーニ	5	新国立劇場 2011/2012 シーズン	
2月	沈黙	松村禎三	5	新国立劇場 2011/2012 シーズン	新制作・中劇場
3月	さまよえるオランダ人	R. ワグナー	5	新国立劇場 2011/2012 シーズン	
4月	オテロ	G. ヴェルディ	5	新国立劇場 2011/2012 シーズン	
4月	ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	5	新国立劇場 2011/2012 シーズン	
6月	ローエングリン	R. ワグナー	6	新国立劇場 2011/2012 シーズン	新制作
7月	ラ・ボエーム	G. プッチーニ	6	平成24年度 新国立劇場 高校生のためのオペラ 鑑賞教室	普及公演事業
10月	ピーター・グライムズ	B. ブリテン	5	平成24年度（第67回） 文化庁芸術祭主催公演 新国立劇場開場15周年 2012/2013 シーズンオー プニング公演	新制作・文化庁芸術祭 執行委員会との共催
11月	トスカ	G. プッチーニ	5	平成24年度（第67回） 文化庁芸術祭協賛公演 新国立劇場開場15周年 2012/2013 シーズン	
11～ 12月	セビリアの理髪師	G. ロッシーニ	5	平成24年度（第67回） 文化庁芸術祭協賛公演 新国立劇場開場15周年 2012/2013 シーズン	
—	9作品	7人	52/490	—	—

* この他、G. ヴェルディ《アイダ》（コンサート形式）を、オペラパレスで、日中国交正常化40周年記念2012「日中国民交流友好年」認定行事として、7月に2回実施した。
「尾高忠明芸術監督による特別企画Ⅱ」として、W.A. モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》（演奏会形式）を、中劇場で1回公演した。

表4-2 2012年新国立劇場主催のオペラ公演（他会場での公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
10月	愛の妙薬	G. ドニゼッティ	2	平成24年度文化庁 地域 発・文化芸術創造発信イ ニシアチブ 平成24年度新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑 賞教室・関西公演	主催：尼崎市 / （公財） 尼崎市総合文化セン ター / 新国立劇場 会場：あましんアルカ イックホール 普及 公演事業
—	1作品	1人	2/490	—	—

* この他、G. ヴェルディ《アイダ》（コンサート形式）を、中国・北京市の国家大劇院で、日中国交正常化40周年記念2012「日中国民交流友好年」認定行事として、8月に2回実施した。

回に比べて2011年は合計222回の公演回数へと減少したが、2012年は242回にまで数字を戻した。同団の活動は複数のグループで日本全国あらゆる形態や規模の会場で巡回して、公演を重ねている。会場がどんな困難な条件であっても公演を打つ姿勢と、その営業力には脱帽である。

表4-1、4-2では、新国立劇場が自らの会場で実施した公演、さらに劇場外公演について取り上げている。

新国立劇場の主催公演のうち、新制作は3つのプロダクション。2月に松村禎三作曲の《沈黙》を5回、2013年のワーグナー・イヤーの前哨戦として6月に《ローエングリン》を6回、開場15周年記念および2012/2013シーズンのオープニングとして、10月に《ピーター・グライムズ》を5回公演した。《ピーター・グライムズ》は、ベルギー王立モネ劇場からのレンタル・プロダクションでの上演となった。既に、高い評価を得ている演出でもあり、期待にたがわず素晴らしい内容となった。

新国立劇場が劇場外公演として実施した兵庫県尼崎市での《愛の妙薬》は2回公演。これは、「平成24年度文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」の助成を得て、「高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」として実施されたものである。

2-3. オペラ公演への助成制度

前項のとおり、国内団体による公演では、複数の助成制度が活用されている。以下、2012（平成24）年に国が実施した助成の種類を整理した。

各地のオペラ団体が主催、実施している団体型オペラ制作への補助金には、「文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）」がある。これは文化庁の補助金を、（独）日本芸術文化振興会を通じ、舞台

芸術の水準を向上させる牽引力となっている。トップレベルの芸術団体が行う舞台芸術の創造事業に対して、各団体に助成するものである。これにより、主として大規模なオペラ公演事業やオーケストラの定期公演等に対して助成が行われた。オペラ団体では、（公財）東京二期会や（公財）日本オペラ振興会（平成24年4月1日より公益財団法人に移行）、（公社）関西二期会、堺シティオペラ（一社）、（有）オペラシアターこんにゃく座、東京オペラ・プロデュースの各団体が、各主催公演事業に対して同助成を受けている。この他、（独）日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金による助成には、「現代舞台芸術創造普及活動（音楽）」があり、NPO法人関西芸術振興会（関西歌劇団）や首都オペラなどが助成を受けている。さらに、各地域で活動するオペラ団体は、同振興会の同じ基金のうち「アマチュア等の文化団体活動」枠での助成を受けている場合もある。学校等への巡回公演として、文化庁が「次代を担う子どもの文化芸術体験事業—巡回公演事業—」を実施しており（同事業では、アーティストの派遣事業なども実施）、各団体はこの枠での助成を受けて、各地域での学校公演を行っているケースが多くみられる。

各地のホール等が主催して実施された劇場型オペラ制作には、「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」等が活用された。先述したとおり、同事業の共同制作公演助成により、2012年は、（公財）びわ湖ホール、（公財）神奈川芸術文化財団（神奈川県民ホール）と（公財）東京二期会を中心とした共同制作公演や、これも先述した（公財）金沢芸術創造財団、（財）高岡市民文化振興事業団、（財）石川県音楽文化振興事業団と（公財）日本オペラ振興会（日本オペラ協会）の共同制作公演等が実施された。この他、新国立劇場の「高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」事業

は、「地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」を活用して行われた。また、(独)日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金による助成には、「地域文化施設公演・展示活動: 文化会館公演活動」があり、各地域の文化施設等が主催するオペラ公演に対しての助成も行われている。

上記は、国から受けられる助成金であり、加えて、東京都をはじめとする地方自治体、さらに民間財団等からの助成も実施されている。これらを活用して、オペラ団体やホール等、主催者となる各組織は資金確保に努めている状況である。

2-4. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体の公演は61回と、2010年の51回、2011年の56回から少しずつ上演回数が増加している。新国立劇場オペラ研修所をはじめ、各オペラ団体が設置したオペラ研修所の発表公演、各音楽大学の大学オペラ公演などが大小様々な規模で定期的に行われている。これらが、教育研究団体公演の毎年の安定した上演回数確保につながっているのだが、そうした活動がオペラ公演を創造するための人材育成に直接資するであろうことは言

うまでもない。教育研究団体公演の演目は、若い人材を育てることを目的に、モーツァルト等のアンサンブル・オペラが取り上げられるケースが多い。

新国立劇場オペラ研修所は、《スペインの時》と《フィレンツェの悲劇》を3回ずつ取り上げ、新国立劇場中劇場で発表公演が行われた。

この他にも、たとえば東京二期会が3年に1度のペースで実施している「ニューウェーブ・オペラ劇場」公演は、若手歌手が研鑽成果を発表する場として機能している。2012年は、《スペイン時間》《子どもと魔法》が2回ずつ、新国立劇場中劇場で公演が実施された。

2-5. 海外団体公演【表6、図3】

海外団体公演は、2010年に126回行われていたが、2011年には33回の公演が震災の影響で中止になった結果、74回へと激減した。2012年は78回で、前年とほぼ同数となった。発表されていて中止になるといった公演はなかったものの、震災の影響が未だにあるのではないかと推測できる。

2012年に行われた5団体の公演のうち、2

表5 2012年の教育研究団体公演活動データ*

団体名	作品名	作曲家名	大規模会場		中・小規模会場		合計
			上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
新国立劇場オペラ研修所	フィレンツェの悲劇	A. ツェムリンスキー	3	6	0	0	6
	スペインの時	M. ラヴェル	3				
東邦音楽大学	魔笛	W.A. モーツァルト	3	3	2	2	5
武蔵野音楽大学	魔笛	W.A. モーツァルト	4	4	0	0	4
焼津中央高等学校合唱部	仮面舞踏会	G. ヴェルディ	4	4	0	0	4
愛知県立芸術大学	ヘンゼルとグレーテル	E. フンパーディンク	3	3	0	0	3
大阪音楽大学	魔笛	W.A. モーツァルト	2	3	0	0	3
	コジ・ファン・トゥッテ	W.A. モーツァルト	1				
国立音楽大学	ノイローゼ患者の一夜	N. ロータ	1	3	0	0	3
	ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	2				
東京藝術大学	Don Giovanni	W.A. モーツァルト	2	3	0	0	3
	カーリユー・リヴァー	B. ブリテン	1				
8団体合計上演回数 / 総上演回数	9作品	7人	—	29/490	—	2/627	31/1117

* 大規模会場で、教育研究型公演の開催実績が3回以上ある団体。合計および50音順の掲載。学生主催公演など有志による公演などは含めない。

団体が20回の「拠点型」公演（4都市以下での公演）を、3団体が58回の「巡回型」公演（5都市以上での公演）を実施した。2011年は「拠点型」が40回、「巡回型」が34回だったから、「拠点型」は20回で半減、「巡回型」は増加したことになる。ただし、2011年はもともと「拠点型」公演が多数計画されていた「当たり年」で回数が多かったもので、2012年になって何等かの要因で減少したということではなさそうだ。逆に、「巡回型」公演は、2010年の101回から激減している。来日した5団体のうち、3団体はウィーン国立歌劇場をはじめオーストリアから、2団体はウクライナとブルガリアという東欧系の国に所属している歌劇場である。

「拠点型」の公演形態をとるウィーン・フォルクスオーパーの招聘公演が、3演目で11回、同じくウィーン国立歌劇場の招聘公演が3演目で9回行われている。ウィーン・フォルクスオーパーの公演は全て東京文化会館で、ウィーン国立歌劇場の招聘公演は東京文化会館で2演目、神奈川県民ホールで1演目

行われた。

「巡回型」の公演形態をとるウクライナ国立オデッサ歌劇場が2演目を17回、15会場で公演を行い、ウィーンの森 Bühne バーデン市劇場が1演目を20回、20会場で、さらにソフィア国立歌劇場が3演目を21回、11会場で公演実施した。この「巡回型」公演のおかげで、結果として、24都道県で海外団体による招聘オペラ公演が鑑賞できた。

図3 2012年海外団体の公演（全78回）・所属国別割合

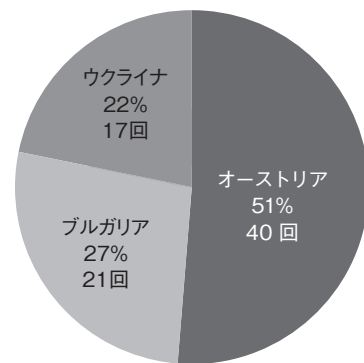


表6 2012年海外団体の公演活動データ（大規模会場*）

上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計	開催地 (都道府県数)
1月	ウクライナ	ウクライナ国立オデッサ歌劇場	トゥーランドット	G. プッチーニ	14	17	10
			イーゴリ公	A. ボロディン	3		2
5月	オーストリア	ウィーン・フォルクスオーパー	こうもり	J. シュトラウスII	4	11	1
			ウィンザーの陽気な女房たち	O. ニコライ	3		1
			メリー・ウィドウ	F. レハール	4		1
9～10月	オーストリア	ウィーンの森 Bühne バーデン市劇場	トスカ	G. プッチーニ	20	20	18
10～11月	オーストリア	ウィーン国立歌劇場	サロメ	R. シュトラウス	3	9	1
			フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	3		1
			アンナ・ボレーナ	G. ドニゼッティ	3		1
11月	ブルガリア	ソフィア国立歌劇場	トスカ	G. プッチーニ	5	21	4
			カヴァレリア・ルスティカーナ	P. マスカーニ	8		8
			ジャンニ・スキッキ	G. プッチーニ	8		8
—	3ヶ国	5団体	11作品	9人	78	78/490	24都道県

*劇場名は、主催者表記に準じる。2012年は、中・小規模会場での海外団体の公演は行われなかった。

3. 指揮者と演出家

(指揮者)

2012年に登場した指揮者は、日本人174人、外国人31人となった。2011年の日本人149人に比べると大きく増加しており、外国人は2011年も31人で変わらない。

日本人のうち、大規模会場での公演活動を中心に行った指揮者は、牧村邦彦が、ニュー・オペラシアター神戸の《ラ・ボエーム》、ひろしまオペラ・音楽推進委員会《遣唐使〜阿倍仲麻呂〜》、みつなかオペラ《ランメルモールのルチア》などで合計12回、現田茂夫が《セビリアの理髪師》の巡回公演で12回、佐藤正浩が石川県音楽文化振興事業団《カルメン》や「福島-Fukushima-復興・復活オペラプロジェクト」《白虎》等で12回となっている。

さらに、沼尻竜典が、びわ湖ホールと神奈川県民ホール他による共同制作公演《タンホイザー》、新国立劇場《椿姫》など大規模な公演で11回となり、飯守泰次郎が東京二期会の《パルジファル》等で10回振っている。

中・小規模公演にも範囲を広げると、リリカ・イタリアーナの活動で澤木和彦が15回、東京合唱協会の巡回公演《あまんじゃくとうりこひめ》で12回の内藤彰と、それぞれ登場回数が多くなった。

外国人のうち、「拠点型」公演およびその他特徴のある公演の指揮者では、ペーター・シュナイダーがウィーン国立歌劇場日本公演《サロメ》《フィガロの結婚》各3回の指揮、および新国立劇場の《ローエングリン》6回による12回となったことが目立つ。このうち、《サロメ》は、怪我で来日できなくなった同劇場の音楽総監督(GMD) フランツ・ウェルザー＝メストの代役での登板だったものの、ヴェテランならではの盤石の指揮ぶりだった。

このほか、「巡回型」公演では、ウィーンの森Bühne バーデン市劇場のクリスティア

ン・ポオラックが20回、ウクライナ国立オデッサ歌劇場のユーリイ・ヤコヴェンコが13回、ソフィア国立歌劇場でアレクサンドロ・サンジョルジが13回振っている。

(演出家)

演出家は日本人175人(共同演出者を含めると178人)、外国人は29の個人やグループの名前が挙げられた。日本人は2011年の127(共同演出者を含めると134)人からの大幅な増加となり、外国人は同年の33人から減少した。

日本人演出家では、大規模公演を中心とした演出家では中村敬一の20回が多い。横浜シティオペラ、ひろしまオペラルネットワーク、びわ湖ホール等、各地域の組織での演出のほか、大阪音楽大学や国立音楽大学など、教育研究団体での演出も行っている。十川稔が同じく20回で、これは、テノールの錦織健が巡回公演した《セビリアの理髪師》などの演出によるものである。次は、栗國淳の17回で、新国立劇場の《ラ・ボエーム》や大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス《イル・カンピエッロ》他での演出を担当した。岩田達宗は、藤原歌劇団《夢遊病の女》、関西歌劇団《カルメン》などの演出を16回。今井伸昭が、広島オペラアンサンブルなどの演出で、同じく16回演出している。次いで、15回は飯塚励生。日生劇場の《メデア》での演出等がある。

この他、「巡回型」公演を中心とした演出で、大石哲史が共同演出作品も含めると113回となった。さらに、関矢幸雄が《金剛山のトラたいじ》で85回、伊藤多恵が《ピノッキオ》で68回、鄭義信が《ネズミの涙》で43回となった。

外国人演出家では、新国立劇場による公演でマティアス・フォン・シュテークマンが11回となった。内訳は再演の《さまよえるオランダ人》が5回、新制作の《ローエング

リン》が6回である。さらに、ダニエレ・アバドが東京二期会の《ナブッコ》で3回、兵庫県立芸術文化センター《トスカ》で8回の合計11回となった。次が、5回を記録した以下の新国立劇場のプロダクションである。ウィリー・デッカーの《ピーター・グライムズ》、ヨーゼフ・E. ケップリンガー《セビリアの理髪師》、マリオ・マルトーネの《オテロ》、グリシャ・アサガロフ《ドン・ジョヴァンニ》、アントネッロ・マダウ＝ディアツの《トスカ》で、全て5回ずつ行われた。

また、「巡回型」公演を行ったウィーンの森 Bühne バーデン市劇場によるルウチア・メシュヴィッツの《トスカ》が20回、ウクライナ国立オデッサ歌劇場による《トゥーランドット》でのナジェジダ・シュヴェッツの14回などが挙げられる。

クラウス・グートの《パルジファル》4回、ミヒャエル・ハンペの《タンホイザー》4回などには言及しておきたい。また、ラ・フラ・デルス・パウスは、サントリーホールでのクセナキス作曲《オレスティア》で大きな話題となった。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

2012年は、海外の作品の上演回数が2011年の530回から636回へと増加、日本の作品の上演回数も同様に2011年の373回から

481回へと大幅に増加した。総上演回数の増加が影響していることは当然であるが、上演された作品数が増えたことも理由に挙げられるだろう。海外の作品は2011年の88作品から2012年は97作品へ、日本の作品は2011年の51作品から2012年は75作品へと増加している。幅広く多様な作品が取り上げられたことが見て取れる。

4-1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

今年は例年トップの座にあった《カルメン》が1位を逃したことが目立つ。2012年は、一気に13位になった。上位10位までに、プッチーニ《トスカ》《ラ・ボエーム》《ジャンニ・スキッキ》《トゥーランドット》、モーツァルトの《魔笛》《フィガロの結婚》《ドン・ジョヴァンニ》、J. シュトラウスⅡの《こうもり》、フンパーディンクの《ヘンゼルとグレーテル》、マスカーニの《カヴァレリア・ルスティカーナ》、ロッシーニの《セビリアの理髪師》が並んでいる。《トスカ》は、新国立劇場、兵庫県立芸術文化センターのほか、ウィーンの森 Bühne バーデン市劇場、ソフィア国立歌劇場が来日時にとりあげた。チマローザの《秘密の結婚》が、四国二期会などで取り上げられたことにより、17位に入ったのは新しい傾向だったものの、作品の性格上、比較的小規模な公演が中心である。

表7 オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回

* () 内は、共作者等を数に入れた場合の数字。

表8-1 2012年に日本で上演された海外のオペラ作品

(大規模会場での上演実績のあるもの、全97作品中・上位18作品、タイトルは便宜的に統一)

No.	作品名	作曲家名	大規模会場	中・小規模会場	合計
1	トスカ	G. プッチーニ	39	6	45
2	魔笛	W.A. モーツァルト	20	15	35
3	こうもり	J. シュトラウスⅡ	12	20	32
4	フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	20	10	30
5	ラ・ボエーム	G. プッチーニ	18	9	27
6	ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	13	12	25
7	ヘンゼルとグレーテル	E. フンパーディンク	14	10	24
8	カヴァレリア・ルスティカーナ	P. マスカーニ	15	7	22
9	ジャンニ・スキッキ	G. プッチーニ	12	9	21
10	トゥーランドット	G. プッチーニ	20	0	20
10	セビリアの理髪師	G. ロッシーニ	18	2	20
12	愛の妙薬	G. ドニゼッティ	6	13	19
13	カルメン	G. ビゼー	16	2	18
14	蝶々夫人	G. プッチーニ	9	7	16
15	道化師	R. レオンカヴァッロ	6	8	14
16	メリー・ウィドウ	F. レハール	6	6	12
17	秘密の結婚	D. チマローザ	2	9	11
18	椿姫	G. ヴェルディ	5	5	10
合計 / 総上演回数	—	—	251/490	150/627	401/1117

表8-2 2012年に日本で上演された海外の作曲家

(全51人中、上位10人)

No.	作曲家名	上演回数
1	G. プッチーニ	133
2	W.A. モーツァルト	105
3	G. ヴェルディ	43
4	G. ドニゼッティ	38
5	J. シュトラウスⅡ	36
6	G.C. メノッティ	25
7	E. フンパーディンク	24
7	P. マスカーニ	24
9	R. ワグナー	23
10	G. ロッシーニ	21
合計 / 総上演回数	—	472/1117

4-2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

日本のオペラ作品は、オペラシアターこんにゃく座の取り上げる作品が、上位を占める傾向は例年どおり。松村禎三作曲の《沈黙》の新制作公演が、新国立劇場で5回行われた。

中・小規模会場では、各地域での鑑賞教室を目的とした「巡回型」公演が中心である。A表とB表を合わせた作曲家別の上演回数では、林光が《森は生きている》などの作品で148回、萩京子が《ネズミの涙》や《ピノッキオ》など複数の作品で129回と飛び抜けて

おり、この他には井上正志が85回などとなっている。これらは全て、オペラシアターこんにゃく座やオペレッタ劇団ともしび等、国内団体の「巡回型」公演で作品が取り上げられている作曲家である。

5. 上演地域の分布と会場別データ【表10、表11、図4、表12-1、表12-2】

上演地域の分布は毎年少しずつ異なっているものの、東京都を中心とした首都圏に偏っている状況は変わらない。そうした中で、2010年は山梨県で公演が開催されなかったのが、2011年は福島県、佐賀県で、2012年は鳥取県で公演開催が確認できなかった。

2012年の上位10位を見ると、首都圏の東京、神奈川、千葉が上位3位を占め、他には埼玉、愛知、大阪、兵庫、広島が入り、多少の順位の移動はあるものの、ほぼ例年通りの開催状況になった。これまでは上位に入ってこなかった栃木県が9位に、岐阜県等が10位に上がっていることが目立つ。

東京は、2011年が373回だったのが455

表9-1 2012年に国内で上演された日本のオペラ作品 (大規模会場)

*上演回数5回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	ネズミの涙	萩 京子	31	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で12回公演あり
2	森は生きている	林 光	13	2	オペラシアターこんにゃく座、びわ湖ホール	中・小規模会場で79回公演あり
3	ピノッキオ	萩 京子	8	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で60回公演あり
4	沈黙	松村 禎三	5	1	新国立劇場	—
合計 / 総上演回数			57/490	—	—	—

表9-2 2012年に国内で上演された日本のオペラ作品 (中・小規模会場)

*上演回数20回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	金剛山のトラたいじ	井上 正志	85	1	オペレッタ劇団ともしび	大規模会場で1回公演あり
2	森は生きている	林 光	79	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で13回公演あり
3	ピノッキオ	萩 京子	60	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で8回公演あり
4	あまんじゃくとうりこひめ	林 光	25	6	東京合唱協会、(財)河内長野市文化振興財団、ほか	大規模会場で1回公演あり
5	ねこのくにのおきゃくさま	林 光	21	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で4回公演あり
合計 / 総上演回数			270/627	—	—	—

回へと大幅に増え、2010年の431回を上回った。

東京の公演回数が増加した原因は、国内団体による公演数が312回から400回となったことが大きい。一方で海外団体の上演回数が、2010年が53回で2011年には40回だったのが、一層減少して28回となった。教育研究団体は2011年の21回から2012年の27回へとさらに増えた。

この他に10位以内に入った都府県は、大規模な公演実施が可能となる会場があること、音楽大学等の教育機関があること、人口が多く招聘オペラ公演を実施しやすいこと、そして多くの大小のオペラ団体が活発な活動を行っていること等がその理由となっている。たとえば神奈川県では、神奈川県民ホールやみなとみらいホールなど劇場型のオペラ公演、大小のオペラ団体による公演のほか、昭和音楽大学、洗足学園大学、日本オペラ振興会オペラ歌手育成部などの教育研究機関による公演、さらには神奈川県民ホールでの招

聘オペラ公演等が活発に行われている。こうした多様な組織がオペラ制作を行っていることで、東京に次ぐ公演回数を重ねているのである。この傾向は、高等教育機関や大規模なホールがある愛知県などでも同様だと言える。

栃木県は、オペラシアターこんにゃく座の公演、岐阜県は、中・小規模会場ばかりとはいえ、「ぎふ清流国体・ぎふ清流大会 文化事業プログラム」としての「第17回岐阜県民文化祭・ぎふ文化の祭典」での公演開催が回数の増えた理由である。このような国民文化祭や国民体育祭などの開催は、従来から、当該地域のオペラ公演数に直接影響を及ぼすケースがみられる。

表12の会場別総上演回数に移ろう。大規模会場のうち、新国立劇場は、2010年、2011年から全く変動することなく70回、東京文化会館は2010年の34回から2011年の40回、そして2012年は41回へ、兵庫県立芸術文化センターは2010年の17回から

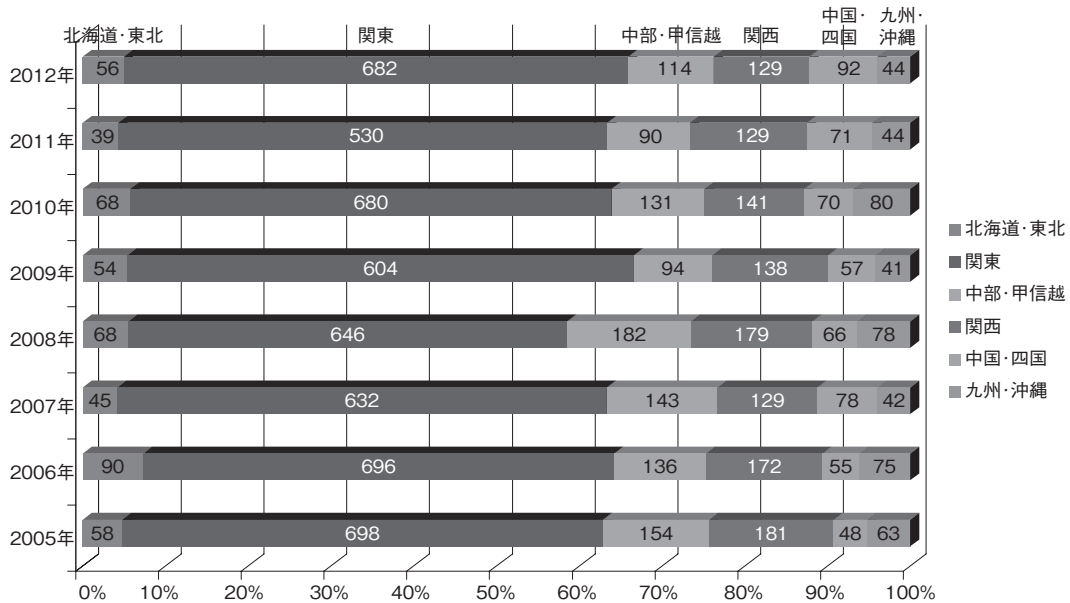
表10 2012年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数 順位
1	北海道	6	10	0	0	1	1	7	11	19
2	青森	2	7	0	0	0	0	2	7	27
3	岩手	3	11	0	0	2	2	5	13	14
4	宮城	4	12	0	0	0	0	4	12	17
5	秋田	2	3	0	0	1	1	3	4	39
6	山形	3	3	0	0	0	0	3	3	40
7	福島	4	6	0	0	0	0	4	6	28
8	茨城	3	10	0	0	2	2	5	12	17
9	栃木	4	17	0	0	1	1	5	18	9
10	群馬	2	2	0	0	0	0	2	2	43
11	埼玉	18	40	1	2	3	3	22	45	4
12	千葉	9	57	1	1	2	5	12	63	3
13	東京	97	400	8	27	5	28	110	455	1
14	神奈川	24	71	3	8	4	8	31	87	2
15	新潟	4	5	0	0	0	0	4	5	35
16	富山	3	4	0	0	1	2	4	6	28
17	石川	5	7	1	1	0	0	6	8	25
18	福井	3	6	0	0	0	0	3	6	28
19	山梨	3	9	0	0	0	0	3	9	23
20	長野	5	15	0	0	1	1	6	16	13
21	岐阜	6	17	0	0	0	0	6	17	10
22	静岡	4	8	1	4	1	1	6	13	14
23	愛知	9	21	3	9	3	4	15	34	8
24	三重	3	5	0	0	0	0	3	5	35
25	滋賀	5	12	0	0	1	1	6	13	14
26	京都	4	7	2	4	0	0	6	11	19
27	大阪	15	37	3	5	0	0	18	42	5
28	兵庫	18	36	0	0	3	5	21	41	6
29	奈良	4	7	0	0	1	1	5	8	25
30	和歌山	5	9	0	0	0	0	5	9	23
31	鳥取	0	0	0	0	0	0	0	0	—
32	島根	5	17	0	0	0	0	5	17	10
33	岡山	2	2	0	0	1	1	3	3	40
34	広島	9	38	0	0	0	0	9	38	7
35	山口	6	10	0	0	0	0	6	10	21
36	徳島	3	5	0	0	1	1	4	6	28
37	香川	5	9	0	0	1	1	6	10	21
38	愛媛	2	5	0	0	0	0	2	5	35
39	高知	1	2	0	0	1	1	2	3	40
40	福岡	3	13	0	0	3	4	6	17	10
41	佐賀	0	0	0	0	1	1	1	1	45
42	長崎	2	5	0	0	0	0	2	5	35
43	熊本	4	4	0	0	2	2	6	6	28
44	大分	2	2	0	0	0	0	2	2	43
45	宮崎	1	1	0	0	0	0	1	1	45
46	鹿児島	3	5	0	0	1	1	4	6	28
47	沖縄	3	6	0	0	0	0	3	6	28
合計	—	—	978	—	61	—	78	—	1117	—

表11 2012年の都道府県別・地域別総計

都道府県名	大規模会場		中・小規模会場		上演回数比率	地域
	団体数	上演回数	団体数	上演回数	総上演回数	
北海道	4	5	3	6	5.01%	北海道・東北
青森	2	7	0	0		
岩手	3	9	2	4		
宮城	2	3	3	9		
秋田	3	3	1	1		
山形	3	3	0	0		
福島	2	3	2	3		
地域合計	—	33	—	23	56	
茨城	4	4	2	8	61.06%	関東
栃木	4	9	2	9		
群馬	1	1	1	1		
埼玉	10	15	13	30		
千葉	6	9	7	54		
東京	49	199	65	256		
神奈川	17	34	16	53		
地域合計	—	271	—	411	682	
新潟	2	2	2	3	10.21%	中部・甲信越
富山	3	5	1	1		
石川	3	3	3	5		
福井	2	4	1	2		
山梨	0	0	3	9		
長野	5	13	2	3		
岐阜	0	0	6	17		
静岡	6	13	0	0		
愛知	9	13	8	21		
地域合計	—	53	—	61	114	
三重	2	2	1	3	11.55%	関西
滋賀	5	10	1	3		
京都	4	7	2	4		
大阪	10	18	10	24		
兵庫	11	24	10	17		
奈良	1	1	4	7		
和歌山	1	1	5	8		
地域合計	—	63	—	66	129	
鳥取	0	0	0	0	8.24%	中国・四国
島根	5	6	1	11		
岡山	2	2	1	1		
広島	8	17	5	21		
山口	4	4	2	6		
徳島	3	3	1	3		
香川	4	5	2	5		
愛媛	1	2	1	3		
高知	1	1	1	2		
地域合計	—	40	—	52	92	
福岡	5	9	1	8	3.94%	九州・沖縄
佐賀	1	1	0	0		
長崎	1	1	1	4		
熊本	5	5	1	1		
大分	2	2	0	0		
宮崎	1	1	0	0		
鹿児島	4	5	1	1		
沖縄	3	6	0	0		
地域合計	—	30	—	14	44	
合計	—	490	—	627	1117	—

図4 地域別総上演回数推移



2011年の14回、そして2012年は13回となっており、大きな変化があるとは言えないだろう。劇場主催行事、貸館などに一定のペースができてきているかのようだ。

この他の公演会場としては、例年どおり、サンパール荒川、アステールプラザ、神奈川県民ホール、びわ湖ホール、日生劇場、尼崎市総合文化センター あましんアルカイックホールが挙げられている。これらの中には、ホールによる自主制作公演の他、各地のオペラ団体が公演拠点として活用しているところもあり、劇場を中心としたオペラ制作の位置づけが一層重要になってきたと言えそうだ。

6. まとめ

2012年は、総上演回数が1,117回にまで回復したこと、大小さまざまなオペラ団体の活動が多様に展開されたことによる国内団体のオペラ公演数の増加などが見て取れた。2012年が、オペラ界が活況を呈するきっかけの年になると考えても良いのかもしれない。東日本大震災の影響をともに受けて総

上演回数が903回にまで激減した2011年に比べれば、2012年は、2010年の1,170回に近い数字まで総上演回数を戻している。

大規模な劇場型公演、あるいは東京二期会、藤原歌劇団といった規模の大きな公演を主催する組織による団体型公演は継続して行われている。さらに、団体とホールとの共同制作公演や劇場外公演等も含め、これら大型の公演には多様な助成金が活用されていることに加え、各組織は企業協賛集めにも余念がない。歌手等の集まりである小規模なオペラグループ等による中・小規模会場での公演が増加したのも、2012年の特徴である。こうした状況を鑑みると、東日本大震災で受けた衝撃は、オペラ界では癒えたかのように見える。

しかしながら、未だ東日本大震災の影響を受けていると考える現象が、少なからず見受けられたことも事実だ。

大きくは海外団体による公演回数の伸び悩みが挙げられる。2011年のように、既に発表されていた招聘オペラ公演が公演中止と

表 12-1 2012 年の会場別総上演回数 (8 回以上開催の大規模会場、[] 内は同一施設内の中・小規模会場)

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	上演回数
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	49	0	0	49	70*
		新国立劇場中劇場	15	6	0	21	
		新国立劇場小劇場 (中・小規模)	[2]	0	0	[2]	
2	東京都	東京文化会館大ホール	20	0	21	41	41*
		東京文化会館小ホール	[2]	0	0	[2]	
3	東京都	サンパール荒川 (荒川区民会館) 大ホール	18	0	0	18	18
4	兵庫県	兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール	9	0	3	12	13*
		兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール	1	0	0	1	
		兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール	[5]	0	0	[5]	
5	広島県	アステールプラザ大ホール	12	0	0	12	12*
		アステールプラザ中ホール (能舞台)	[2]	0	0	[2]	
		アステールプラザ多目的スタジオ	[8]	0	0	[8]	
6	神奈川県	神奈川県民ホール大ホール	7	0	4	11	11*
		神奈川県民ホール小ホール	[4]	0	0	[4]	
7	滋賀県	びわ湖ホール大ホール	4	0	1	5	9
		びわ湖ホール中ホール	4	0	0	4	
8	東京都	日生劇場	8	0	0	8	8
8	兵庫県	尼崎市総合文化センター あましんアルカイックホール	8	0	0	8	8
合計 / 総上演回数			155*	6	29	190*	190*/490

表 12-2 2012 年の会場別総上演回数 (10 回以上開催の中・小規模会場、[] 内は同一施設内の大規模会場)

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	上演回数
1	東京都	俳優座劇場	18	0	0	18	18
2	東京都	調布市せんがわ劇場	15	0	0	15	15
3	東京都	シアターX	13	0	0	13	13
4	東京都	町田市民フォーラムホール	11	0	0	11	11
5	広島県	アステールプラザ大ホール	[12]	0	0	[12]	10*
		アステールプラザ中ホール（能舞台）	2	0	0	2	
		アステールプラザ多目的スタジオ	8	0	0	8	
5	東京都	日暮里サニーホールホール	4	0	0	4	10
		日暮里サニーホールコンサートサロン	4	2	0	6	
合計／総上演回数		—	75*	2	0	77*	77*/627

* 該当する規模の会場の上演回数を合計した。表 12-1 大規模会場の上演回数には、中・小規模会場での上演回数の合計は含まれていない。
表 12-2 中・小規模会場の総上演回数には、大規模会場での上演回数は含まれていない。

なったという事実はなかったものの、これまでに盛んに行われていた「巡回型」オペラ公演を実施したのは 3 団体のみで、数字のうえでは 2010 年以前からみると激減している。招聘オペラ公演の減少が、明らかに東日本大震災の影響を受けたためではないかと考えることもできるし、あるいは東欧系の安価な「巡回型」オペラ公演を、各地域の公共ホー

ル等が購入して実施するというビジネスモデルが、各地の現状と合致しなくなったと考えることもできるかもしれない。これは次年以降の傾向と合わせて考えていくことが必要になりそうだ。

一方で、海外の歌劇場などとの協働によるオペラ制作も盛んに行われるようになった。新国立劇場のように海外の歌劇場による良質

のプロダクションをレンタルしたり、びわ湖ホールのように海外の歌劇場と国際共同制作したりといった、芸術水準の担保、コスト削減に向けた動きである。これは、組織間交流や芸術家等の人材交流等の成果だと考えられ、日本が、今後、世界のオペラ制作の流れの一部となり、世界水準のオペラ公演が行われるように、こうした動きが継続していくことを望みたい。

日本の人材の海外での活動も目覚ましい。具体的な例を挙げるなら、2013年8月からドイツ・リューベック歌劇場の音楽総監督に就く沼尻竜典、現在はドイツ・ザールブリュッケン州立歌劇場音楽総監督で、2014年のシーズンからドイツ・ヴッパータール市立歌劇場のインテンダント（オペラ）に就く上岡敏之、2008年からフランス・リヨン歌劇場首席指揮者のポストにある大野和士などの指揮者たちがいる。彼らの人脈、加えて各オペラ団体や各ホールが持つそれぞれの海外とのつながりなども大いに活用していけるのではないか。

一方で小さなオペラ団体、中規模・小規模会場でのオペラ公演も活発に行われている。これらの公演が、大学院や各組織の研修所などを卒業したばかりの若手歌手や、若手スタッフ（指揮者や演出家などを含めた人材）が経験を積む場となっているのも事実である。2012年は、これまで行われてきた劇場や団体による大規模なオペラ制作と、歌手グループなどによる中規模や小規模なオペラ制作の2つの方向性が顕著になったように感じられる。

また、若手歌手などの人材を教育する教育研究機関の活動、若い観客にオペラを届ける鑑賞教室の実施など、歌手、スタッフ、観客それぞれを育成するための各組織の活動も活発に行われている。こうした動きが、我が国の将来のオペラ制作に直接・間接に役立つよう願ってやまない。

(本稿のデータ分析後に判明した公演記録があるため、巻末の公演記録と若干の相異点があることをお断り致します。)